

「変わらないもの—信仰、希望、愛」

コリントの信徒への手紙 — 13 章 8～13 節

キリスト教センター所長・聖学院大学 政治経済学部チャプレン 菊地 順

先週から秋学期が始まり、全学礼拝も再開されました。この秋学期の全学礼拝は、大学の「創立 30 周年を覚えてのシリーズ礼拝を守っています。1988 年の大学創立から 30 年が経ち、今年度は 31 年目を迎えています。30 年前というと、今日出席している学生の皆さんはまだ生まれていなかった時です。そこで、30 年前を少し振り返ってみますと、30 年前の 1988 年は、時代の大きな変化を予感させていた時代であったように思います。象徴的であったのは、何よりも、国鉄が今の JR に変わったことです。1988 年の 4 月から、国鉄が一斉に JR となりました。今ではすっかりおなじみになっていますが、当時は緑色で描かれた JR という文字が、とても新鮮に見えたものです。しかし、今にして思えば、それは新しい時代、新しい変動の前触れでもあったかと思えます。その後起きたのが、バブルの崩壊でした。株価が下落し、日本経済は長期にわたる不景気に突入して行きました。また、自然災害も多くなっていったように思います。1991 年には九州の普賢岳が爆発し、土石流が発生するという災害が起こりました。1995 年には阪神淡路大震災が起こり、加えてオウム真理教による地下鉄サリン事件が発生しました。そして、2011 年に東日本大震災が起こったのは、まだ記憶に新しいところですが、世界的に見ても、1989 年にはベルリンの壁が崩壊し、新しい時代の幕開けを感じましたが、2001 年にはアメリカで同時多発テロが起き、その後湾岸戦争、アフガニスタンでの戦争、さらにイラクでの戦争と、戦争が拡大して行き、それと共に過激派によるテロが横行して行きました。そして希望に満ちていたはずの 21 世紀は、一挙に不安定な時代へと突入していったように思います。

こうした時代を迎えて、今改めて思い起こす一冊の本があります。それは、アメリカ人で日系のフランシス・フクヤマという政治学者が書いた『「信」無くば立たず』という本です。「信」とは「信頼」の「信」です。元々の英語の題は「Trust」、「信頼」というタイトルです。この本は、企業でも社会でも国家でも大切なのは信頼であって、企業や社会や国家が成功するかどうかは、信頼をどう確立するかにかかっているということを論じたものです。そしてその信頼の確立こそが 21 世紀の課題でもあると予言した書物です。この書物は 1995 年に書かれたものですが、この予言は当たったのではないのでしょうか。否定的な意味ではありますが、当たったように思います。今、世界では、いろいろところで信頼が失われているのではないのでしょうか。信頼が失われ、懐疑と対立が蔓延しているように思います。アメリカのトランプ大統領のアメリカ・ファーストの考えは、その典型ではないのでしょうか。そしてそこに見られるのは、信頼の欠如です。そしてまた、それゆえの混乱と対立です。正に信頼なくしては、国家も世界も立ち行かないことを、今わたしたちは身をもって経験しているのではないのでしょうか。そして改めて、信頼の回復の必要性を痛感しているのではないのでしょうか。そしてそれはまた、わたしたちの一人ひとりの生活についても言えることではないかと思えます。

話は、突然大きく変わりますが、私は高校時代、美術部に属していました。そして一時、毎日のように油絵を描いていました。油絵を描いたことのある人はご存じだと思いますが、油絵はキャンバス(canvas)に描きます。キャンバスは店で買うこともできますが、また自分で作ることもできます。木の枠を作り、それにキャンバスの布地を張って作ります。そのとき、きちんと貼らないと、歪んだり、だぶついたりしてしまいます。そこで梃のような道具があって、それを用いて布地をぴんと張るわけです。そして釘を打って留めます。そうして出来上がったキャンバスに絵を描くわけです。ですから、当然のことですが、キャンバスが大事になります。ぴんとむらなく張ったキャンバスでなければ、ちゃんとした絵は描けないからです。話は少し飛躍しますが、わたしは、時々、人生も同じではないかと思うのです。人生も、ぴんと張ったキャンバスのようにしっかりとした土台がないと、人生という絵を描いていくことはできないのではないかと思うのです。そしてしっかりとした土台とは、社会が信頼に満ちているということではないかと思うのです。歪んだ、だぶついたキャンバスに絵を描いても、まともな絵にならないように、信頼の欠けた疑いと対立に満ちた社会では、十分にそれぞれに与えられている力を発揮し、人生を意義あるものとして行くことはできないように思います。しっかりとした信頼関係の上にこそ、それぞれの人生を豊かに展開して行くことができるのではないのでしょうか。そしてそれは、この大学生活においても言えることだと思います。この大学生活を充実した意義あるものとするためには、やはり信頼関係が大切なのではないのでしょうか。学生同士の信頼関係、学生と教職員の信頼関係、そしてまた教職員同士の信頼関係がなければ、健全な大学生活を展開することはできないように思います。

ところで、この信頼関係は人間同士の事柄ですが、この信頼関係を築くためには、もう一つ大切な関係があります。それは神との関係です。なぜなら、神こそ最も信頼できる方であるからです。聖書は、神は真実な方であると語っています。たとえ人間が神を裏切るとしても、神は人間に信頼を寄せていて下さり、その救いの約束を実現して下さる方であるからです。そして事実、それはイエス・キリストにおいて実現しました。イエス・キリストの十字架の贖いの出来事を通して、神はわたしたち罪人と和解して下さり、神の子として生きる道を切り開いて下さったのです。わたしたちがいくら不真実であっても、神はその真実を貫かれる方であるのです。神は裏切らないのです。神はわたしたちを見捨てないのです。そこに神の真実があります。そしてこの神の真実にこそ、わたしたちは信頼することができるのです。依り頼むことができるのです。そしてこの神への信頼において、わたしたちは、人間同士の信頼へと向かっていくことができるのです。なぜなら、たとえ人に裏切られるとしても神は裏切らないからなのです。神の真実が人間の裏切りよりもはるかに大きいからなのです。そこにすべての信頼の基があります。そしてその神への信頼こそ、聖学院大学が 30 年間変わることなく祈り求めてきたことであり、また聖学院大学が絶えず立脚してきた土台でもあるのです。

今日の聖書の箇所には、こう記されています。「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大なるものは、愛である」。「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る」と言うのです。それはどの時代にあっても、この三つは人間を真実に生かす力であるからなのです。人間は「最も大なるものは愛である」と言われているように、愛なしに生きることはできません。しかしその愛も、人間の愛だけでは限界があります。必要なのは神の愛です。わたしたちを愛して止まない神の愛こそ、わたしたちになくってはならない愛なのです。また、希望なしにも、わたしたちは生きること

はできません。しかし、それも人間による希望だけでは限界があります。むしろ、そこにはしばしば失望があるのではないのでしょうか。失望ではなく、真実の希望に与って行くためには、神にある希望こそ不可欠なのです。真実な神こそ、わたしたちの真実の希望となるからなのです。そしてそれは、真実の神へと信頼する中で与えられて行くのです。そこに信仰があります。信仰において、神の希望に与り、また神の愛に満たされていくのです。そして、それが人間を生かす真実の力となっていくのです。ですから、すべての基盤は信仰にあると言えます。神への信頼こそ、わたしたちに真実の希望と愛をもたらしてくれるのです。

この信仰、希望、愛は、聖学院大学が、創立以来変わらずに大切にしてきたものでもあります。そして、それはこの全学礼拝において、絶えず語られ、聞かれてきたことでもあります。聖学院大学も、創立以来、いろいろ変化を経験してきました。建物も、初めは今の図書館や 2 号館、4 号館、そして 1 カフェのある 1 号館だけでした。その後、3 号館や 7 号館や 8 号館が建ち、14 年前には、このチャペルが建てられました。そして人も大きく変わりました。30 年前を知っている人は本当に少なくなりました。また、学部も学科も増えました。政治経済学部の 1 学部から 3 学部まで増え、また大学院もできました。そのように、このキャンパスも大きく変わりましたが、変わらないのは、この全学礼拝です。場所や時間帯は変わりましたが、創立以来変わることなく守られてきました。そして常に、信仰、希望、愛が語られ、また聞かれてきたのです。なぜなら、それこそ、永遠に変わらないものであるからなのです。そして、その永遠に変わらないものこそ、聖学院大学の命でもあるのです。その永遠に変わらないものを、これからも日々祈り求めて行きたいと思います。

2018 年 10 月 5 日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「創立 30 周年を覚えて」